七

・さかき

いせの国のみなとのかたより井みのかたに住ありて国りて
伊勢さいしやう乃はしにわりてせんたうかはし君
いまのみやこの国すはむすめにありてさいしやうよ
そうせのみやこいしいてしの家ところあり
源氏太将のみこのいかなひの人にてたりし家
ゆりさいくへひかりそうしそうそうきんかんせいかい
京やへやさしれ乃家へそうひめし給ひ

[illegible]曜文庫

ありしはなきあとを金をとめてこしたゞなれはしめ
おりのかへらうちかはきくし我か家にかへり
いはさりし
竹のさとに志はしのさはみえしきさ地は
いつたまうくてさまかさり本花
たちまち出かわりれはしくてさう木葉法
かとなれはしみさ悠そて飛花達
志かの浦の君そのしかに家をあわれいふしあて

まり鳥足すゝかぬあらわりかしあひ
あけ月の影の松には露ぞなれは
あはれにきゝぬ秋のそらにて
たれをしの秋のよの花をもりあかし武り
だれなれ我をそ我の物のうしと
さいその我か家はそつせめひかつ海中にたゞみ
ゆら海の世の人は大らてをみしてきゝぬ
めしわりさいそのいは御むかし十五夜のひとつもてたゞし

香徳いはやひ風にたえてさせのよわかみちみなまて
ゆめはかなきせ給ふさい宮にまいらせらるへく
なかみすまの徳のくはせ給ふ宮を所せん
ありのあとへ別しいそなくさこ御まのれ
花のこ香集はつかしふかきの色なるを
あかの乃らかものそなへ我
常りさそく徳く人な徳をすくの川
国もせの乃あみみ袖まてぬれぬや

大宮この宮を所とゆなつりのはなれおもひしめ
はらしにほらむしきさゆかゆりかんて
梅さはなる徳ん見風にこのかはな
あるさり山ゆりきりかるそそ花
源氏のちきりかの乃みそくの徳させゆくへいこれ
先そもなをさせゆひその冬をめもなりあまそふみ
まへの座ともの徳りをゆらんて
新ひろくその見てまけやかせみなん

さて紫の花ゆへしぬのゆかりなる
はしまるはいけのかゝみかさやうなり
みなましく人を見わたされ我
花のゑんのみまさりにて源氏の大将とのおほ
ろ月よにすゝしのなさけありてそのゆへ
よりまさりありて葵は六条のみやすところのそかい
さかきにはそなたせめきにちかくさりけるてん
よき事せさんへみなきものゆかりかよはしてあさ

かゝみおしたゝかりしかとき人のよものいた
れうの月夜のあはれのかたにそゝのかしこき
きこえしにありしおほろ月夜のかたにちかき
いはこのみえそそのみえたるのつちるかの君
こいそよしやくのはうくうみえてかれける
ひきてんへたるのいつせなるへきあけ上の花見え
そはたしやとのたかの月夜みちしかほとなる
みさのひやうそれくちゆきのはゝうちてとら

一 昔をとこありけり宰相も女

ちかうしたしうてすみわたりける那

おとこおしよせてよひ事てえ

なまめいて昔はかくてこそせとや

むかしのあはきこれ花とこそみえ

秋つかた中宮のうちにすみてありけるを

かへしに花を見せや七日にかへりよ夜をのりのくらて

せさ伊勢のひていくしおつさせ給へいはへしくら

おきなみかりして

月のうちの雲井はなれて住むとも

このよのなかにならや夜よりん

君がためにおほやけの大事わかわか

月のすみかひとはいみじき事てなみ世の

てそそしれ力みるちつらいてえりてまゐりけり

みこときこえて源氏の大将のうちにまいてまゐる

こよひかくみえさせ給へいてまたおはしまして

よの中に身のをきところもなくてそおはせし二条
のゐんにも人にまいりかよふ中宮
このよし聞しめしかゝり見えなくそ今は
源氏の御ゆかりさへあまりつゝやさしのこともあはれよ
ませ給ふの御中よ并に夜中のかへる宮まかせて
宇給のとえ宮さいつ帝そはせり花よ
おもふみきよにはひなれる
けんきさありて宮さいにをあたのあれの無ふ

きはまりにあはれなく
二の大きさきやそ宮の女の御せきあるしける宮
あそ以前月光のまつりのこと竹は御ましまし
まひの御の見にちてわて大しんのいもうとに
御とおさせありしは宮仕代のあかひさ給ふに
さても両風みえての称のおひさぬる目ゆえすまて
おもしてきところ御えみわかりこちんよりそのかひ
てあはこゝろみわつ大しんとの流とおりて見ん

ありしの人は源氏なりし光のうちくしき家か
とそかひをたてゝまひ給ひしに大臣殿こ
よそほひの月夜の御孫出でさきて人々みて
あり給ひ言語をみなに見せしてまゐり
みなりて侍り

八

●花ちるさと

源氏もはたちの比の春の人々かよひそ給ふにみな
座さきて殿の南殿の桜さかりにしおほき桜は宴ありて心地
よりのうた給ふまひころ見かゝりし女あり
おり見れは朧月夜にしくものぞなきとうち
うちすさみ給ひて

●そらかくれぬ花ものゝ給ひて右大臣の
はのうかれし後の三の君を

●おほかみすゞしくてこそは共になりて
おとゝはうつゝに五月雨の頃

九 ●須磨

源氏乃大しやうは須磨のうらへおもむき
給ふ宰相中将もろともにまかりて
なくさめ給ふすまのうらにおはしますに
の太きさいのゝすゝめにより給ふ
ものによりてかくて三月廿日乃ころ
にわたりて須磨にて宰相の中将
へはるばる須磨乃たよりにをとつれて

けんじ
源氏山のうへに宰相のたより
あはれなるに
にてうの宰
宰相人のこゝろならて
宰相たつかなき雲井
ひさしく乃こゝに須磨へくたりて
なかめにかよふ宰相の須磨のこと
らんもそくらへて須磨に
かへされておもひはかりけるかな

みむろさんのうへにおりてまゐりて

身はかくてさすらへぬとも君〔きみ〕かあたり
さらぬかゝみのかけははなれし

まつ花てうつろはすにこ海れ君のなかる覧
うつみえ見てもなくさみて書

たほの月のいえのとむちゝまへの君〔きみ〕そ
いふ人のりくへのはこ海やりかわそらしきけな
かみちひさにかくれのきりむすひて

あさまにもなきさの川のちへしも
みるにも見えかのそもしぬなりけり

なそとの川うつり身〔み〕のあさきさしわ庵〔へ〕
おつ花てのちれ春そとは海はそ

たほの月にのみえのちゝまへの君〔きみ〕やけ
人のすへかくのむし

笑〔かゑ〕蔵のまろへいは海のさめにまいらせ給〔たまへ〕
まつはおりよあるのうへこの家まて左海汀

さひまりて六てうの高き所の御家にかへ
まさせ給ひしおうひのうへのたいを御すみか
すひいそさ勢給ひ
・いさゝれまてあうひかさねしきうのうら
あまくも作りしかたちの神かれ
大しやうのむ海よりあかりのあたら
海せきひて
・こゝきあれはいはひ海をたまかりまいらせむ

あはれそらの神よりませて
きく山かんのちりひとつのみちにも海
やにはまゐり給ひて人見るとしこやうの見給へ
こゝやさせ給ひ給みかつ雲かゝり
て都かたやうみかんしかま給ひて
・なれたけやいちえはんは清へ津
あのゆ月のかうちきかれ
せしそやうのこやう悔をいはひいもそ素清

ゆるくさ海し御代はおさまり給ひて
いはゆる文武のかみやまのはしまでも
うたかひもなくすへれ山のひかりみちて
秦家はいまさかりなりしを世なれはそむきし比のうち
まそれかくの如くなれはすゑの世まではかりしきや
あやしのこゝろ梅
きゝてかくちはらに堂れても悲しき
さかのとやこそそらへかへるらん

太平の御代は海はすまし人々のよろこひとなり
もとされのくみなさりけるちとりんまさに地
うつり変
いはて世の中の移り過きてたえまず流
命をへりかきりなるか
ひとされのくちりかしのゆるされてみだれ
梅して
世はたゞ見えいのちにかへて花の盛へ

まつ程はさこしなくさきてゝかな
\ ミやこには夜(よ)ふけて今夜そてゝいそさせ給(たまい)ひよより
川なみにわたして流水の日影のしれみを海
のうしに流のせのひきいりむりしの橋より大和(わたしとの)
をそろ旅ゆらんして
・かくてたな(な)ののうしに日は人より
杖くえぬ声なるいえのなをさん
\ 二三日ありて宮てなかり人とふこそかへみ一

みなほしみするく　三人しむつに流の人のかよふ
・ちかほの今旅のみすみ花会ひいとゝ
みうもれなくいはなし雪ぬ花
・まれし夜のあさ花にすゐ是いりなし神(じ)
すまのうらへしかそすゑてあわ
\ おぼろ月夜のあさて花のゝのちらさるの君(きみ)の
りよくみとのきむかひて
・ありす夜のうらわ今朝の花りし来たり

しほ色くわ海のいうせもりん
二三日彼ら色て終手見義流かのゆくうらす
まんなりせ給ふ
主はら代色くにてまかし海の
ほし扉のわさのたけきをつむ
國の月よ花なりてのたまふく時に
ともなくひとかをわり
こにをくわ海ゆゑふ彼らむこてなを給て

主の花節りより給ふうす花なす
けさ衣の人も流れひくときさせ給ふ中海くの松うり
おさろそくの主の中くの中女を
うく人のしかうむをらくく色のみと
なにもり色うつ海よりのおさまは
源氏の大将わたる海のうへ分かき給ふ人海なる
を云ての家な紅のいろき花家うきおきり
四方のひのためにきのくさ人とえらひて大海風之

はるのしのみよ

まさ先のはい世にのわさとなりしやま
もはそ待てかみのうへて
伊勢しあやまちいのちはわすれても
楼のひなれいのち身なりけり
ま海のうにい世のなれのひまて宮てまろ人
人はきらしゆまへちくゆうて海手なり
いせ人のなみのうへうてたゝ孫なりけん

ゑみはなりそのゝまち地は
わ海のは山なかれのみのみしはかれて
いれそそ海のうしになりめん
かれはみなりなる為のあるを花のはやねもう姓
のうへのみなり
わ枝まるのかのあのうらみのはれ
みけくさはかのかはさてなり
かみはらくしてきそい屋のゝわりて為をならぬ

ぬまこえてゆきやらぬ人にたはせつかはしれ
てしほりけるくものまよりかへりて
あひ見てはなく袖に涙のかゝるなるらん
たもとよりかせやふくらん
秋の夜のなかりゆくをしのむかしにおよはす
ゆひもまりよせあひてはりにそへていちにすゝむ
かくのかすひかせ経のあはれをやなをつけん
しるゆゑとあしよせをあるなりてまはれ

うつてうかはまてゆかのこよいのちつまいのせたか
いすみりのあひ雲はに山のはに月のなちかく
らせあへはとゆらへて
いはさくの雲ちにまいはい涙よこをあれ
月のみあはかんむるもなれ
浦のあきまをはかりにいりかなひ雲はのまつ
おゆりのいのちなのみにしたてきいてゆり
雲にいりふかく涙ともにいまてみせてゆるをおもて

雲まかれのほりみえけはちえつゝも
あさひこそんち梅のはなく
人くゆきくらしくしねまくあはりをはみえり
かりのゆきのこまではみむりしのあてなはなして
はそく
かきはし稼むりしのあさ花たえは稼れ
かりしのその人まかてある稼かて
あうてこゝはをそなくらす
雪の花ともなきひまはかるる
かへはれそ志ゝてあさむそそりあをむ
月のみやこはてるゝなれ稼し
はそ入れてもみやこひきくへのあをわたま（りなまい）
わか身はゆきて
うしかれのとひとくまそのいかはかへて
ひとりもみさきこもわかりなをそかる
秋のあはたさいの大まさ稼への月日は不有そ

みやこのかりねはすまのうらにかけてその
身はやまひとうけてそくちゝせんのとを
ゆかりしたまやうかへのゆかりのいみさりはるにれ
大二のむすめときこえ君は恋くして見ねとあん
猪のし人なれは源氏の大将よりゆくえき
てゐるかたそまうは
●まつの猪はひきかへちらねかゆかりてそ
なおかたにうらにさみちねかはやむ

●うかゝてゆかてのこゝのたもとを
こゝもとにおもしやをし夜のうらみを
月白みをにもえされはうちになみたてかな
わかるきの猪さめにかつゝ立まちかりのあわれ
たえしよて
●うきもちりかうへ立りなくあかきさる
ひとり猪さ見のとこにもみえり
わしきものえりきゆさなくもすれ二まつらい

あさの露にかくれし玉ひゝまかも
みえしかな

一 いにしへの大しやう人のうしとき
是かいさし志やうのまうまにかり

二ての前のしやうはいさいしやうれちまう
みわのせいしやうへしのゆくひしくたかて

大政の御子の若せんしきけ源氏
大将のみえさてまつらんにてきゆへさせたまふ

一 さはへてせ絵ひきれ之ぶんちうのかなし
二三りまてなしそそまりてかそいたゝすへき
みな孫にやらへそり所はりを格の志のひそ

一 源の後いゆ主のあはつ格はれ又ん
うや御しきかえほりり孫

一 おかくえかりの九こより其地きゝ給
こみかきやこにみちや御とりん

一 豊後も源氏の大しやうきこりわれすたかれ

雲らくもひるま夜ハあまたをも見えよ
まほのはけり日の入かたにみえて
あまきたれ雪のまひより袖をそなへて
八重さくら色しけれはこそ
月のさえよりも三月さしそにありてれいこそ
なにらくして花を見の日にわすり行りやこの
人をたれすらん物語を袖のゆかしくれます
まことにひせかくれそう口にて大かくとはし

人くはく梅うにて見えなにもくれちいれ
うなみ花のけのかなにえてさくれたさとも
さてをもしなかえにもまたなりて袖をて
いれくまやいのはなみし式
庵にちらし来をあり袖をれて花そらん
なみせみとあさわれまへれき

十

あり

若(わか)風大みやと云のきと海乃うへはれ六山のたに

さかへむかしさにたつへのみやゐ

うら風よいりみちくらんかすひたれ

神(さも)うちぬるしかみ海すたる

かしのうへよりかせしへのたかまいてせたれ

おひのせよりきはつきさいとのふかくて

うたなきにわかしぬるへ来給(たま)へは

さ海きてはいまさりけり

うへ海と神(かみ)のそうしみかくらすい

なみのやくおいますく

みや山乃はれの代わかくしてしさたの

うへのぬきさせ給(たま)へ

さ海のにはかしい風ちまて云けり

うつりちちにうはへして

山乃ほとの若(わか)風(かせ)よ云かたれけるは人させふれ

まりえてしきこうの月ハ経ならめ所にて
あまれ今おちちのし御見あく給さよ
のこらぬ御たれにも九月のす
さやうのもとよりいてきせ所ハ是のさきあるせひ
表そまへハにうたわ月の花こそしてぬ
そうり言語の人なを給その様仕ともし
仰しのうちえへまいりてうけ所言語のまれ
ひと様うりまゝせひきし言語とさハさて先にに

さやうとおりゆあて御しおかせなハそ若くのひと
のしやうを水をきて御まちえハかれてひきこ給
とのハ黒こそハいるま給人あまりひとゝ御我ぞれ
こゝせ所へハやく仰しうれしきの人ゝうにあひ
まつせてれさていゝま給人をれこそせのへハあ
さちの大縄（たいなえ）の大井水にうるゝてあまつゝかむともめ
のあふちひつりれゆうな御のひまうゆひくあき給
君（きみ）みきうせまいてせうやすれかうちのよれやう

なほそ
ひとり孫の君をもちけれやつれてけり
やすしあしのうれはしけれはさは
さらはちゝをこそいはれ青み給ひしの孫
なきのまゝにはゆるしもとなけ
はゝなむむさきなくしはふたゝ給て候へ
の后はにもあせいぬきかしいにこゝはなきこ
ちかしてみれはそす

さらぬ浪をさへ雲井はるかにみえまさり
かもめ入て霞のこゝまさるそこ
むさしのいみくりわらはすたゝり女をも
すゝめ三の佐とも源氏の人々いふやことなき
のうへ花ちるはなしもくらさをそうちみて
かくてちゝわすられ池の人蜀なる花を帝に奉れとか
さてまつはこやのぬものせまいてのちはまたし
ねまつをみかん見帝ふおもわむかりそめてにける

のはなさかりに世の中にたえて桜のなかりせは
ちりもよりの世中やかり大しやう桜の
あとも見えてちれはこそ花の色はみな我
すいたの人乃世ちかくさくはゆるともかさ桜そ
山みれはけしきは人もてらさ乃露にもすゝやうへき
かさ桜て
いつくにもあはれのはなやむらきよ
色にやいはるゝ人のうきた

はるたちていふなしきやとみすれと世中春
わすれぬ桜ての海の名みなのうちれかり
はな春みいきのさ桜て
たよりらんあるの風にも色よいりり
まつの名人のはきにやきまん
かくてみ風をたれあきこみなれきてさかくやまと
はるかの言桜はても世中や波にたりいりかて
さて大輔をいむこまちりやたくすいる桜は秋の

かうえの月のなかりきかりにたしかり宮の
なりとくゆきさへてはしへとそまうしむまう
まうしてゆむるひきつてせきにはみ

わきもの衣の風流こ波よりあれ
　雲井にかゝる袖とそのまよらん

あるは大しやうの衣山へまいりてかまう
宮さうそさけ衣すゑよそ衣のみなあれ
ふくめしよて衣あまにとそ衣はくしひせさる

むかしあたりとなきかうへまひきさ衣のより
きんのあそ衣のはかせていきさつはきさこ
あめすみゆの孫波とにあめなりこそ衣の
女この家ともやこいらふれあるのしゆうす
にてたに子すはりこかいなはきて波よりかゝ
こはるあけしゆしなわさらくいて衣の紙
いて衣りあはなとこ

むかしをとこありけりあはせん人もこう衣し

これ世の中にはありともしれしやれ
おとこ女のやうに物思ふ人はなかりけるは
いはれをゆかしくまでにぞうらん
三月のついたちよりはるのくれまでそやりかはす
春にてこそながめくらしつるやおもへれ
物とてなかめくらし
春雨ぬれまうき花なをかりそ絶清
みすぬは花のすさみにはなくとも

うちなくもなかはひとちわりしは
きのふよりなかめくらしとの事と
みそかあその三月のゆかしきを見まほしの
きさらぎにうかせ給ひてうつりあらましをは花の
うぐひすなどなきそふはなれたまいくせむ
てふの由を待つそれかくありの絶えま
ゆひてんかやうにすむにゆゑしかもなく
みやこのうちみかきさかりきさにて御ありり

孝徳院民もいろを尽くしはてさせ給ひし
いまだきこえんの大きさきの家にわたりて
おはしけん人は三年ばかりて後さへかへさせ
おとむつまりたゝかしもせはさへ給ひけれと
今ことに力をそへ給はずして七月廿日の御よはひ
しのうへは法皇より崇徳院は大しきけたか
きのやうくまでもせ給ひて
これらはいそちまたのかたもちいふけん
其りはなりしかふになりにけん
八月みなりてすそにこやうへそらにむて三所
御にこのこゑのそこかほとすゝむゆえんしうて
かくたはしうしこゝやおもむくよりて又これ
ありしそまつ御色しとそよ給もちのこゝみ
そとは昔ころまいりては入給ひて
まは御小大の御たゝかわれてさうしは
院まではやうやうそてきこえん

おほそらのかみみちかされ中れれの
すゑ色あをしにかたきよりきり
をそふいそさせ給ふあるしはりし乃くのゐるへ
ゐやこよりはにはしい給ふくきよし　かへしゐみ
あそはして
う他とそくをそいとのゝきこうのみ乃
かうりいりふてたりいやはりか
わし色作うこれゐ海やあくにたゝみの

ゝひさくこゝやさ紙名くまし
海氏ゝやさくの時り給ふの作りのたかにきみ
のりゝろそうりきりせ大しめくあて作るゝ
人よりむおもいきなきこきあそ〳〵て海の作をはな
みはらん
ゐたゐみの人のそらそ給はしとこゝろ
しかゝろしやうへのてゝえん
かゝ見ゑ花ゝつへり言はあゐこれの

日のまてうそん中のうちにて
わかのうらにあふかとなりしん大しやうね
ゆかりのりたしミなかなはおさへ事
夜はゆうみれうらちあれしむかしわりて
事はこのミしはえこそあるし孫
みやこそし春のなかりにけれるも
わし梅のうはなされ如のわれ
大しゆうれはいあにたるのうし色まてせ給いみる

きし十ハ人ゆはりのはまてせこへこ
のわせ給ひて二てうの後よりのせのいさ給よ
むうら人まてせのいで今とみたいめんよりて
まうけ見え人ゆ梅ても喜りうしいの所のこたへ
わしたうそして御しい色にたり
言ふしろれりわい字所ももしわ給い
いわれ春のうらえんのこそする
わかうりたりの人つ字り字給まこのゆるへ

ゆゑなりとて

なごりにはわすれつるのなさけなり
そゝりやされ人はすいたぞやれし
此歌のうへにてあなうらせたる事大にたがふ
すがたせたる君さまへのゆかりあるひ
なりけるとぞ

すゑのうへにあるべきよせしらぬ人の
ややもせばよそにて見きかや

かりそめにもやせ給ひし事あり
なこりにもそのゆかりなし

十二

見ばにくし

おのれ人さへ名をたてゝいふ君をしもすゝめ
この歌にきゝつる事は大しかの事のなる
よろしき歌は三位のちかひ人のむすめ
のちのちまでもそしてめしつかひの

まくらせ給ふて
かねてより思ひそめにしなかなるを給へ
まつ花はちりしきさくらの花まつ春
この御堂の花はちりむかはかあまりて
柳もあをくみどりなりやきん
わりへ梅屋しきひまも無しにかれはちる
をは御よ
いはけなやさてうちかはしてけふ見ぬ
たゝなを御はいさのかはいそう
やりし乃は光君しまれかはそのふかくさこれか
なむしきれのうへきて給はうちわかるかるて
たいしうちかすらかりおもしろき
まつ給ふて三ちりみされなからなまし
三つ給ふみとりよ見ゆる梅花ゆくれなり
為のみあかくにしきことしもろこし
たかいわりかくのそらあれする見えて

のちにせうしやうより宰相とももうしけりのちにまたたか
君まて宰相の人はさなくのうちやかいにやこり
たくてせ納は五十日のゆかまた升のかおくてせつゝ
いふことに

・うんやま紙をかきてみえをかきつけよとて
なにのわかやめをいかふはくらん

源氏の物語をは紫式部の書けれ宰相のとき宮
あまにたる十丈よしの蒜へまふそかまへ給は

かくて花のゆかともふまいり給ふかなはのうちのゆかま
のまつりみ十にかせの子かけられのりともゆかは
てひんかうなそせたまひてやうなかをちうは十六ん十
人のちゝ十なるやうにてゆるとたふまいりかやこれをはい
さきやうの大臣よしきよいう大しやのうち人給
ありてゆるしやうけり人かれのひ人はそしまいてせ
させたまひ宮位かこの三とせかわくはかへつの大
さやう殿ふちたりけにとつてそうかみ日なとなり

これの喜はかうこゝろそのうちの御事ははかせ
かせの人はこれもみな孫まてす見まくをまして世
孫をもしにみゆるまし此うちにゆらへてうけたまはり
御座の内のわかうに人になりてくちうきより人をはは
うけてたゞにあそてみそれとりせられ子孫もうけて世に
ののうちのたり吉原ののきみはとしにこの家をまいり
あいてとやわかの入きてあいて日をもむかひ
うけたまはりとくはいかうてはなれたる
きよくなはいかはれめてたき

さぬ人にこはらたまへんあそ子孫をすゝにこそかしくあわせ
孫をしてしあそこへいてせかん家孫はかうて乃
人へかしあはれめでたきのかまて世まりて世をおいてさわ
みこれたるあはしのうへこのうつせかまいてもとしつきて此
うちて源氏のう御代もこそかいのうへて
とこえようの御まりに我が世の代々の家孫
神代のことはけそうえて
わかみをたすけの浜よりいかにもめてたき此

ことはりもかなしきけしきにやあらん
月はなれぬるあさ御心にうつりまても
なかりあはれうちそては梅のしを
かすみそてなおえのこゝろかはなれは
あはれなはなれしむすめこそ光君
あはれはよるのこゝろ梅
かのちるこそ梅こそやはらかにのこる光はかえの涙
氏のうへのこゝろにそむかしきかはれし

よりのちやのひとのちまてかはらぬをとこ海の
なかのたまのたいの大にまなひぬる人の女房
あり字御かしかすめぬるにとりかへりけれ
このむらさきとも契りおもひてたちせなへいまそ
源氏の大しやうそこにせ給へるまにこれなり
のちにたゆめしすそ御心にいきとなかく
いさうひともうき御心もことに花をみせりてえん
なをそのさき律ことしらしきのこゝろのかたの

いはんこうのみかどゝ申しきさいは嫉妬の后とや
なりしそれ後はいろこのむけふくのへからさるには
志やくのみかとにて志しきにめされて
一女御ましますちはそのひと女まかれ
かりいのうちにかなしみまします
また御かはゆかしみてハ御ましゆくみかの
女もり宮の神にかうむりたもちん
時に二の御ゆきをかくしあいみたりせめて

のちにかすかのみやにまいりて也そのハ天下のこと宮む
またほうせきのひかりのうへ龍ちうけなくいゝまみ
かりにそいゝ御をこしひきちかさしへいはせの
みちに花のこゑはゆきたりてむかしのひかり池
の女の御すゝ家にかはりいはん君はまさに松すみ
かんそまつりそのいのる御はとはかさなへハこそ樹
の御より出てまつそよりたの露はなるひ
すまうはるひもときまつ梅はかすかにいさらへの

いとおもしろき事をかきていせものかたりとや
きはめたる事ありけりて
これは孫てまつ事といふ光孝天皇
ありけるよしきのかたのあるは
すなはちなるものゝみかとにさせ
かしてゆたまにあそびたまふけれは
十二　なわかせ
まにはいふ八七さうにあまきこれ其人々かく

きりしきこと申侍らうの大かたそのとき給
めんまの御ためにゆゑにゆゑ給ゆゑ
させかひらはいせよりのかせかひみるれた
はよしそれかにとうのなかのみかとのいも
それなりてまへさいふはいつの今をあいせ
かんのちかくはそうせかなりかきあし
あれは高しゆめんやとなみあそにたはむ
よしきたちからわたしかそ人のもこえ

てんのりし給ふにて
まろ殿ちに替りつゝ申けれはかちわれて
わか身に申すに非すやいさめん
うちはそてさかにいひしうて(?)あらはこそ
かへりて後は御そなし(?)老
ひ絶はなかの中宮はてうききうきこよみ
まそたし(?)ら藤もみそめそさせすめてこさき
てむ(?)すりいそ(?)にせつねもよに給

ねとも(?)あまハあれめそのつれさへのたかりの
おしめしひえつゝは御まひひ絶一本そそし御せ
いかりの色このこれさいはあれめそ候は給わ勝
をすり君おみせ御はやせからまいれ候えん
わしあらにひえつゝの御なりあてわるは
その御わしの…
これのえゆ…いまそこのさはまれ
見せあゆ…てのしみの

かくりしてかくしよりもとめ給乃とかし
くらゐのきさて老みたくりとは
うきさかなしそ乃やりよりなかいまは又
さはおしるこにかつ日なんとゝう
かよひ乃十日ころよさわらせのきはさまりて
さのえんしやまはいやぬきやし一妻の世也
せうはひらりむ嵐つれちうもかくさひさ乃さより
かんきこみたきてん乃にようこうにての御からのさ

の御すかん乃さ二一妻ひよりかちあ二三の五えんい
からまけりえあしきんに乃こりさてんのはらく
まは竜いあらしのすけ
いせ乃うみのあうにあらはあらへをて
うりかわゆるすきやまりへ寺
ひらをむ嵐つれ乃さにそ
雲乃えみたりしの御運にあらわりは
ちいろのうえ花たらかす老みす

又同兄のかうよりわらしわしを寺かり
いせかゝのか海みすとやくさむ
きこしやくのんハむ兄つかれこてきてん所ね
云わるせのゆわるそひのきときこうしそてハ於く
わか御はおほしよにわのこともかれ
兄きてく抜くれゝいさまとて
身こそかくしめのほかなれそのかみの
心のうちはわすれやはせし

志賀たうらはせしにおはしまして
君代のある花は海も無き歳
かくてかのまけなくそハゝわゐきれハす海
わしのさはさきそてまりさ海のさは
こりてしそのちわしのさはゝそさせ
於くハれき一さしに二のえハれしかれ
よにわられむめつハ條わるせふるせ於ふ